

# 専念寺通信

八月号 (NO. 144)

<http://sennenji.s296.xrea.com/>

例年にないきびしい暑さがつづいています。7月のうちに各地で、すでに37度や38度という最高気温が報道されています。熱中症の患者さんの人数も日々ふえているようです。ひときわ暑い今年の夏、皆さま、おかわりなくお過ごしですか？

## ☆盂蘭盆会

ことしのお盆は全体にお天気に恵まれ、朝から強い日差しのなか、大勢の檀家さまがおいでくださいました。7月13日から15日まで、そして次の祭日16日も含め、168軒の檀家さまがお墓参りにいらっしゃいました。抱っこされて来寺していた赤ちゃんが3歳になり「こんにちは！」と挨拶したり、小学生とっていたお嬢さんがいつの間にか高校生、そして、婚約中の若い女性は奥さまに、大玄関でみなさまをお迎えしていますと、ときの経つことの早さを感じさせられます。かなりの年配になっても、必ず兄弟、姉妹でおいでになる方、嫁ぎ先とご実家の両方にお参りされる方、入りの日に亡くなった方を迎えに、そして明けの日

に送りに、と必ず来寺される方もいらっしゃいます。専念寺の檀家さまの信仰心の篤さ、たいせつな方を思いやる心の優しさに、大玄関で20年近く接して参りました。

☆写真は、専念寺の女性スタッフ、淵上優香がお盆明けに東北の被災地に行き、撮影してきたものです。比較的整



備されているのは都市の中心部だけで、まだまだ瓦礫が残ったままなことで、その瓦礫にブルーシートがかけられているのがせめての手当てであること、国道にはガードレールはなく、左下の写真のように



標識が曲がったままでとりあえずは通行可能に道路が補修されていること、そして、宮城県に入ると、支援はまだ届いておらず、ボランティアの人がプレハブの建物を作って、そこで地元の人が少しのものを販売していること、などを聞きました。県外からの人がどの程度来ていたのかを聞きましたが、関係者らしき視察の人、タクシーに数人で乗って来ているグループくらいしか、そもそも人が来ていないとのことでした。もはや、ボランティアのちからでは回復することの難しい段階にさしかかっている印象を受けました。また、土木業者が地元でなく、首都の大手企業中心であることも報道されており、何が「支援」になるのか、私たちは真剣に考えなくてはなりません。原子力発電所の事故のその後もあまり報道されなくなりました。まして、被害にあった人たちのその後は、仮設から親戚の家に、そこから家族ばらばらに、などが断片的に耳に入る程度です。何ができるのか、何が効果があるのかをじっくり考える必要があります。こんな悲惨な天災、人災にあっても、まだ原子力発電所は必要なのでしょうか。地震の多いこの国に、海に囲まれて、地震のあとの津波の怖さを心底知った私たちは、もう原発をやめるべきなのではないのでしょうか。

☆小さなお知らせ：写真を撮影してくれた淵上優香は夫君の九州転勤が決まり、8月いっぱい退職することになりました。皆様に可愛がって頂き、家族同然に思っていたので本当に残念です。また、勤務の最後に夫婦で被災地を訪問し報告してくれ、貴重な話を聞くことができました。新しい地でもきっと活発に有意義に生きていこうと思っています。

平成24年8月1日 大黒